

報 会

令和6年
会報第2号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-16
鹿児島県公立小・中学校
教頭会館県教頭会事務局

Tel 099-226-8268

Fax 099-822-5580

私の勧める



『ダブル・ゴール・コーチ』

著者 ジム・トンブソン
発行所 東洋館出版社

鹿児島市立黒神中学校

上戸 洋平

中学校では、体育大会、合唱コンクールや部活動など、勝ち負けが出てくる場面が多いのではないだろうか。私自身、担任や部活動顧問として、勝利と生徒の成長のどちらを優先すべきか、悩むことがありました。そんな中、この本に出会い、中学生年代への指導については「勝利と育成」のダブル・ゴールを目指す

べきだと考えることができました。

ダブル・ゴール・コーチモデルとは、「勝つことを目指しつつ、スポーツを通じて人生の教訓や健やかな人格形成のために必要なことを教える」

ことです。さまざまな活動を通して、「もうこれ以上頑張れない」と思っても、実はもう少しだけ頑張ることができ「ことを学べたり、自分で立てた目標のために努力する必要性を選手に教えたりすることです。このダブル・ゴールこそが子どもたちに人格形成上よい影響を与えることができるというものでした。

また、子どもたちだけではなくエモーショナル・タンク（Eタンク）を満たすという考え方は教職員に対しても生かすことができると思われました。Eタンクとは、直面

する課題を解決するとき、その人が能力を発揮できるように助力するものを考える際の心理学的構成概念です。周りにいくら助言しても、Eタンクが満たされていないと受け入れることはできません。「褒める」「感謝する」「よい行動に気付く」「聞く」などの方法でEタンクの満ちた学校を目指していけば、よりよい学校経営につながるのではないのでしょうか。

私にとってこの本は、中学生への指導の在り方について悩んでいたときに出会い、とても参考となった1冊です。

雑感



支えられる・支える

長島町立伊唐小学校

長谷部 勇太

満開の桜の花が咲いていた四月。教頭として初の勤務地である伊唐小学校にやってきた。伊唐大橋を渡り、伊唐島に着いた時、新たな職務に緊張と期待とが入り交じった複雑な感情だった。

四月から始まった教頭としての業務。今までの仕事とは異なる動きに目が回る間もなく過ぎていった。職員室の一番奥で、名前ではない役職名で呼ばれることに慣れなかった。周りのために働こうという思いとは相反して、迷惑をかけるしまうことも多々あった。しかし、そのような日々も、校長・同僚の先生方に支えていただいた。また、過去に

つながりのあった諸先輩方や友人にも助けられた。そして、地域の催し物に参加すると、温かく迎え入れてくださった伊唐校区の地域・保護者の皆様もいらした。たくさんの人々に支えられていることを実感した一年だった。

伊唐島は、ぶりの養殖などの漁業とジャガイモ栽培などの農業が盛んな豊かな島である。自然や産業を生かした豊かな学習素材が豊富にある。伊唐小学校は、令和6年度を初年度として県教育委員会指定「探究的な学び」の研究校として研究を行っている。ここで学ぶ子供たちがわくわく・どきどきするような学習をどう展開していくかを先生方と一緒に考えていくことは、大変ながらもやりがいがある仕事である。

支えられた一年を経て、今後は支える存在にもなりたい。ただし、今後も相も変わらず支えられることと思う。支えられることと支えることを繰り返しながら成長していきたい。教頭としての学びは始まったばかりである。

きつかけをつくる

奄美市立朝日中学校

川畑 順哉

教頭職を拝命し、心の中で高浜虚子の俳句「春風や闘志いだきて 丘に立つ」の情景を思い浮かべ「やるぞ」という気概をもって四月一日を迎えた。やはり学校は教職員が信念をもって教育活動を行う姿、生徒が行事等を通して成長する姿、保護者や地域が学校に寄せる期待などを最前線で感じることができると。このような職場で勤務できることは本当に幸せである。

教頭職は公文書の受付・作成、報告物対応、各種会議、環境整備、外部対応など多岐に渡るが、実際に担ってみて感じたことは何にでも挑戦できる実によりがいのある楽しい仕事だ。

赴任後、私は特別支援学級に在籍する不登校傾向の生徒

が気になっていた。あいさつを

しても言葉が掛けても反応が薄く、当然笑顔など見ることはなかった。関係づくりのきつ

かけになればと考えた私は、

その生徒と一緒に校内の花壇の一角に野菜を植えた。生徒

が登校した日は「葉が元気だね。」「大きくなっているね。」

野菜の生長を確かめるように二人で言葉を交わし一緒に観察している。その生徒が野菜

を見つめる眼差しや表情から生長を心から喜び、楽しみに

していることが伝わる。野菜を植えたことがきつかけとなり

関係を築けた。「現状を変えなければ何らか

のきつかけ（しかけ）が必要であり、それをつくるのは自分

自身。」そのことを改めて感じた瞬間だった。

赴任して約十月。まだまだ挑戦したいことがある。その

実現のためにどのようなきつかけ（しかけ）づくりが

できるのかを考え、動き続ける教頭でありたい。

随想



故郷を知り故郷を誇りに思えるように

枕崎市立桜山小学校

鯉坂 聡

私の故郷は鹿児島市の鴨池小学校区である。当時は1200名ほどの児童がおり、いつもにぎやかだった。今県庁が建っているところは芝生の広場で、学校行事で訪れたり、放課後友達と思い切りボール遊びをしたりしていた記憶がある。

私は教員になって、薩摩川内市、鹿児島市、南九州市、徳之島町、南大隅町、そして今の枕崎市と六市町で生活してきた。その土地ならではのよさがあり、どの地も自分の故郷のように勝手に感じている。新聞をめくれば、自然とこれまでの赴任地の記事が目に見え込んで、そのたびにうれしく思う。

子供たちは、自分の故郷のよさをどれほど知っているのだろうか。教員としてそのよさをどれだけ伝えられているだろうか。どれだけ学ぶ機会を与えられているだろうか。

枕崎市は誰もが知っているかつおの町である。車の窓を開けて街を走ると、かつお節工場独特の香りがしてくる。まさにここしか味わうことのできない香りである。

本校では毎年五年生が「味覚の授業」を行っている。これは、フランスで行われている食育活動「味覚の一週間」の日本版で、鹿児島県内では本校でしか実施していない。枕崎のかつお節のすばらしさを実感するとてもよい学習機会であり、将来子供たちがどこへ行っても、ずっと誇りに思っつてほしいと強く思う。

いろんな土地を回り、それぞれのよさを知っている教員だからこそ伝えられる故郷のよさがあるように私は思う。子供たちが自分の故郷を大切に思える教育活動を充実させていきたい。

業務改善が進む

今だからこそ

鹿児島市立中洲小学校

尾辻 孝徳

働き方改革に伴う業務改善が強く叫ばれている。各学校においても日課表の見直し、会議の精選など、工夫をされていることと思う。今後、ますます拍車がかかってくると思う。

とはいえ、限られた勤務時間の中で、教材研究、学級事務の時間を確保するのは容易ではない。時数も行事も極限まで見直しているのが現状ではないだろうか。

そこで、最近、デジタルの有効活用が主流となっている。連絡などは、校内連絡機能を用いることで、職員朝会や職員会議の時間を減らし、その分、職員の放課後等の時間を生み出すというものだ。学校現場へのICT環境が整備される中、その機能を有効活用し、業務改善の

課題解決を進める、まさしくタイムリーな取組かと思う。

しかしながら、職員同士の会話が減った、データで流しても周知が徹底せず、共通理解が図れないという声が聞かれる。本校でもデジタル機能を活用した取組を進めているが同時に人の繋がりが損なわれないことを気を付けている。

具体的には、お茶の時間には職員室に集まる、感謝や労いの言葉を伝え合うなどである。その影響もあるのか、職員間の雰囲気がとても良い。補教を快く引き受けたり、行事等の準備に全員で取り組んだりするチーム体制が確立しており、職員の輪は、本校自慢のストロングポイントだ。

大事なことは何か。社会全体に求められるテーマでもある。不易と流行の2つをしつかり踏まえた上で、業務改善等、学校の抱える諸課題と向き合っていきたい。

自由投稿



新しい部活動のかたち

いちき串木野市立市来中学校
堂園 哲郎

部活動の地域移行が各地で始まろうとしている。部活動については、生徒やその保護者と共に一緒になって作り上げていく楽しさもあり、部活動に積極的に関わっている教員も多い。私自身も部活動をやりたくて体育教師になり、たくさんの方の充実した思いをさせてもらった一人である。しかしながら、その反面、部活動が教師の大きな負担となってきたのも事実である。特に自分の専門外の分野や関わったことのない部活をもたされた教員の苦労は大きいものであると思う。自分の時間や家庭を犠牲にして

部活動に関わり、挙げ句の果ては保護者から要望や苦情を突きつけられ、苦しい思いをしてきた先生方も多いのではないだろうか。それを解消するために地域の専門的な指導者に関わってもらうことは有効だと思う。ただ、地域指導者の発掘が難しかったり、指導者への謝金を受益者負担とするのか、どこからか財源を確保するのかといった問題も発生してくる。また、現状での移行の多くは平日は部活動として活動し、土日だけ地域に移行する。つまり、平日の練習は顧問が行うが、土日の大会等は地域指導者が引率するといった状況も発生し、顧問と地域指導者との連携のあり方も問題になってくる。

しかし、今後の生徒の競技力向上や教員の負担軽減のためには、様々な問題もあるが、行政や地域スポーツクラブなどと連携を取り、より良い形で部活動の地域移行が進むよう積極的に話し合い、取り組んでいくべきだと私は思う。

ここに笑顔あります

湧水町立上場小学校

神之園 恵美

ここは山間にある児童数十九名の小さな学校。

四月、一輪車練習に勤しむ一年生で校庭は賑やかになった。遊具の手すりを使いおぼつかない様子でよろよろと一輪車に乗る。よろけては立ち上がり、また乗る。上級生に励まされ、一年生同士で声を掛け合い、時には喧嘩しながら練習を重ねる。そのうち、手すりから離れて独り乗り挑戦するようになる。

「教頭先生、手、つないで。」

一年生から声がかかる。小さな手は私の手を必死に握りしめ、ふらつく一輪車の上でバランスをとる。補助を務める私の手にも力が入る。子供たちはたくましい。何度転んでも立ち上がる。一年生同士で切磋琢磨しながら、練習しているうちに補助役の私はお役

ごめんになった。

十月、地区合同運動会での一コマ。一輪車演技を披露した十九名に惜しみない温かい拍手が送られた。一年生の初めての挑戦と上級生のすばらしい演技への称賛だ。演技後、子供たちのあふれる笑顔と職員たちの笑顔、そして、我が子の演技を祈る想いで見守った保護者の涙と笑顔。子供たちを中心に地域の方々にも笑顔の輪が広がる。

数か月後、職員室伝言板にはまるで宣言するかのよう「職員室に笑顔あります」

と記されていた。これからも、気負わず私らしくしなやかに教頭としての職務に励みたい。「ここ、上場小に笑顔あり」と、胸を張って言えるように。